

## 「お客様」から「学習する人」へ

館長 友野 澄雄

博物館を訪ねる人は、小学生から高齢者まで、ちょっと立ち寄ってみるかなという人から歴史の専門家まで、その幅は広い。これらすべての人に満足していただける「展示」というのは相当難しい課題である。特別展と銘うって開催しても「専門家には評判はよかったです、どうも入りが悪くて……」という結果になる場合もある。

博物館の管理運営に当たられた先輩の方々に、博物館の管理運営にあたって心がけるべきことをお尋ねしてみると、「なんといっても、資料を集めんことには……」とか、「PRが不足している」とか、「展示をもっと工夫しなければ……」とか、返事は様々である。

博物館は「展示に始まり、展示に終る」という考え方がある。この考えに従って、調査研究・資料収集などの博物館活動に優先して、展示に重点をおき、業者に委託してまでも展示に精力を傾けるというやり方がある。

このような「展示に始まり、展示に終る博物館」について識者は、「来館者が博物館になにを期待し、そこでなにをしようとしているかという、きわめて本質的な問題を見落している。ただ一方的に展示してみせればよいという、見せ物小屋、観の観点に終始し、結局は設置者の自己満足に終っている」と、指摘する。

「ものを並べてひとにみせる」ということは、博物館だけが行う機能ではない。デパートや商店などにも、単なる陳列ではなく、りっぱな展示がある。最近では商品そのものの展示ばかりでなく、商品とは無関係に展示を行っている場合がある。

例えば、喫茶店などでは、民俗資料のコレクションが展示され、民俗博物館よりも貴重な資料が魅力的に展示され、来客の人気を集めている例さえある。

しかし、これらの展示がいかに貴重な資料であり、展示技術がすぐれ、魅力的であっても、それは所詮客寄せのために外ならないであろう。

したがって、博物館における展示とデパートや喫茶店の展示とは目的や志向するところが異なっていることは明白である。

このように考えれば、博物館の展示は展示そのものに意義があるだけでなく、展示の目的にこそ意義があるといわねばなるまい。

岡山県立博物館は歴史博物館であり、一般に「歴史資料」といわれるものを取り扱っているが、あくまでも「人間の歴史」が対象である。「人間の歴史」を実物資料を中心に、歴史事象とその歴史的意義の内容を構成していくのが、展示ということになる。そして、展示した資料によって歴史を語りしめるのである。資料として役立つものは、①だが、②いつ、③どこで、④なぜ、⑤いかに、⑥なにを、などが明らかになったものである。そのためには、不断の調査研究が要請される。その調査研究の蓄積なくしては、すぐれた展示はのぞめない。

私の尊敬する法医学の先生は、警察学校（戦前の場合、ほとんどの生徒は高等小学校高等科の卒業生）から、大学院の院生までに法医学の講義をされていた。その講義は警察学校の生徒にもよく理解され、院生からも尊敬されていた。人がらもあるだろうが、ほんとうの専門家というのはこのような人をいうのだろうと、つねづね思っている。それは誰にでもわかるように話し、説明できる人だと思う。特殊な専門用語を使ったり、いわば身内だけしか通じない言葉を使って優越感(?)をもつようなものは、とても専門家とはいえない。自分がよく理解していないと人にわかるように説明することはできない。

人は物事について興味をもち、わかり始めると学習意欲もわく。幅広い来館者が単なる「お客様」で終るのでなく、「学習する人」に変わることを期待している。そのための工夫改善が当面の課題である。



## 特別展

# みち — 交通の変遷と風俗 —

10.6~11.4

本年度の特別展は、「みち—交通の変遷と風俗—」と題して開催した。瀬戸内海をめぐる海上交通の歴史を概観した昭和56年度特別展「海のみち—瀬戸内の海上交通—」に引き続いて、再度「みち」を主題に設定した。今回は、古代から近世までの道や交通の実態と変遷、道を往来した人々の旅の諸相、文化伝播の様子等に焦点をあて、道の歴史的意義を明確にするよう企画した。

展示資料は、国宝4件・重要文化財4件を含む約80件200点で、平城宮出土の木簡から、旅の様子を描いた絵巻物、熊野詣や伊勢参宮などの社寺参詣資料、近世山陽道の宿駅絵図や旅に携行した道中用具に至るまで多岐にわたった。これらを系統的に展示するとともに、単に陸上交通の推移を展示するだけでなく、道をめぐる社会的背景にも注目し、民衆の生活史の断面を浮き彫りにしようと配慮した。

なお、会期中の10月13日(土)には、九州大学文学部助教授・丸山雍成氏の「近世の街道と宿駅をめぐる諸問題」と題する講演会を開催した。

### 〈古代の道〉

平城京朱雀大路の羅城門から奈良盆地を南下する古道「下つ道」の稗田遺跡(奈良県大和郡山市)では、奈良期の川跡と交差する地点で、橋脚とともに多数の人形、土馬、墨書人面土器等が出土した。これらは、荒れ狂う水神等を鎮め、旅の安全を祈願した祭祀遺物と考えられ、古代人の信仰の一端を示す貴重な資料であった。



墨書人面土器

また、律令体制が整備されると、民衆には国家の命令による強制的な旅が課せられた。租税などの官物輸送、都城建設の役夫や辺境警備にあたる防人の派遣等である。平城宮跡の発掘調査により多量の木簡が出土するが、当地から米・鉄・塩等が輸送されたことがわかる。『続日本紀』によると、「かく聞けり、諸国庸調の脚夫事畢りて郷に還るに、路遠くして根絶え、……途中で辛苦して遂に横斃を致す」とあり、過酷な旅であった。

さらに、都と大宰府を結ぶ大動脈であった古代山陽道の駅家趾出土の瓦(津高・小田駅)を展覧し、『延喜式』にいわゆる「瓦葺粉壁」の駅館施設を彷彿させた。

### 〈中世の道〉

絵巻物に描かれた旅の諸相として、平安末期の漂泊歌人西行法師の行状を描いた「西行物語絵巻」(重文)、教化遍歴の旅に生涯を送った時宗の開祖一遍を描いた「一遍聖絵」(国宝)を紹介した。これらは優れた自然描写はもとより、当時の社会風俗や交通用具の変遷を知る上で貴重な参考資料である。また、美作国稲岡庄に生まれた浄土宗開祖法然の生涯を描いた「法然上人絵伝」(国宝)では、建永2



石山寺縁起(部分)

(1207)年、後鳥羽院の怒りに触れ、四国への配流の旅立ちの劇的な情景を展覧した。さらに、当時の旅風俗を点景として描写した社寺縁起絵「粉河寺縁起」(国宝)と「石山寺縁起」(重文)を展覧したが、特に後者には中世期の逢坂の関や馬借が描かれ注目された。

中世期の社寺参詣の旅としては、熊野詣に焦点をあてた。古代から神聖視されていた熊野は、平安中期以降の末法思想による浄土信仰の対象地となり、貴族階級を中心に「蟻の熊野詣」といわれる程、参詣熱は高揚した。やがて、その風潮は武士・庶民階級へと波及し、その布教活動には熊野先達や比丘尼が携わった。彼らは、祈禱師・宿主を兼ねた御師輩下の地方山伏を中心とした組織で、道案内や熊野信仰の絵解きをし、参詣を誘発した。今回は、熊野信仰を象徴する熊野速玉大社古神宝類(国宝)や当地での御師・先達の活動を示唆する熊野那智大社文書(重文)、また布教活動に用いた絵解きの「那智参詣曼荼羅」で展示構成し、観覧者の注目をひいた。

〈近世の道〉

江戸幕府は、幕藩体制を形成・維持するために、五街道をはじめとする全国交通網の整備を図り、主要街道には宿駅を配置した。五街道に次ぐ脇往還に位置づけられた近世山陽道は、「中国路」または「西国街道」とも称され、唯一の対外貿易港長崎と大坂・江戸を連絡する主要幹線として機能した。ここでは、岡山・津山両藩の藩政資料や、国絵図・各宿駅図によって、山陽道・出雲街道等の近世期における県内道路網を追跡し、そこに展開された旅・通行の様相を考察した。なかでも、旧矢掛宿本陣資料では長崎奉行をはじめとする幕府役人や参勤交代大名等の特権的通行の実態を明らかにしようと試みた。

また、近世期の代表的な社寺参詣の旅として伊勢参宮、特に文政13(1830)年の御蔭参りに焦点をあて展示構成した。御蔭参りとは、近世期にはほぼ50～60年を周期として起った爆発的な庶民の伊勢参詣現象をいい、宗教的熱狂の中に民衆の封建的支配に対する不満を発散させる役割を果たしたともいわれる。文政13年の参詣模様を描いた牛窓神社の絵馬「御蔭参りの図」を中心に、伊勢神宮徴古館からの関連資料を展覧、御蔭参りの社会的背景と意義を考えてみた。

その他、庶民が旅に携行した各種の道中用具を展覧した。小型・軽量化を図り、同時に機能性を重視したものに、観覧者は、先人の生活の知恵を再認識していたようである。



絵馬「御蔭参りの図」(部分)

主な出品物

(◎国宝、○重要文化財)

(名称)	(点数)	(所蔵者)
1. 古代の道		
過所木簡	1点	奈良国立文化財研究所
美作国木簡	1点	"
土馬(奈良県碑田遺跡出土)	5点	奈良県立橿原考古学研究所
墨書人面土器( )	5点	"
人形・齋串( )	5点	"
古代山陽道津高駅家出土瓦	1点	本館
古代山陽道小田駅家出土瓦	一括	岡山県教育委員会

2. 中世の道

(1)絵巻物にみる旅の諸相

●粉河寺縁起	1巻	粉河寺
◎石山寺縁起	1巻	石山寺
●法然上人絵伝	1巻	知恩院
◎西行物語絵巻	1巻	
●一遍上人絵伝	1巻	歎喜光寺
◎遊行上人絵	1巻	常称寺

(2)熊野詣

熊野八葉曼荼羅	1幅	熊野本宮大社
◎那智大社文書	3巻	熊野那智大社
那智参詣曼荼羅	1鋪	補陀洛山寺
銅鉢(豊臣秀頼寄進)	1口	熊野本宮大社
◎熊野速玉大社古神宝類(衾、挿頭華、玉佩、檜扇、金銀装鳥頭太刀など)	19点	熊野速玉大社

3. 近世の道

(1)参勤交代

伝馬朱印状	1通	日本通運通運史料室
御伝馬之定、同添状	2通	"
捨萬石御加増後初御入国御供立之図	4面	津山郷土館
駕籠	1挺	"
毛槍	3本	"

岡山藩参勤交代関係資料(道中日記など)

一括	岡山大学池田家文庫
菅波信道一代記	4冊

(2)近世山陽道と宿駅

備前国・備中国道筋并灘道舟路帳	2冊	岡山大学池田家文庫
矢掛宿絵図	1鋪	
出雲街道略絵図	1巻	
矢掛宿人馬賃銭割賦帳	6冊	

(3)関所

関所手帳(女通行手形)	1通	新居関所史料館
関所手形(鉄砲手形)	1通	"
関所用具(袖搦、突棒、刺股)	3点	新居関所史料館

(4)庶民の旅

往来手形(四国八十八ヶ所巡拝)	2通	
東海道五十三次風俗図屏風	6曲1双	本館
道中用具(道中笠、枕、財布、硯箱、合羽など)	約80点	
文政度御蔭群参絵巻	1巻	伊勢神宮徴古館
御蔭参降下剣先祓	2体	"
御蔭参柄杓	1柄	"
絵馬「御蔭参りの図」	1面	牛窓神社
道中案内記(旅行用心集など)	4冊	

# 平賀元義

5.29~7.1

平賀元義（寛政12年～慶応元年）は幕末期の国学者。一般には万葉調歌人として、また能書家として知られる。これまで、元義については、元義を世に出したことで知られる羽生永明（明治元年～昭和5年）の「註解平賀元義歌集」（大正14年刊）以後、国文学者たちによって歌人平賀元義として紹介されるのが普通で、その歌集も何冊か出版されている。

元義の門人矢吹経正の家に伝わる平賀文庫に「口上」と題する1通の文書がある。これは元義がその門人泰民部の問いに答えたものの草案で、民部は児島郡北浦村（現岡山市北浦）の宮崎八幡宮の神主である。泰民部の問いは、1. 元義の歌について、2. その学問について、3. 地理志について、4. その著述について、5. 元義の先祖についての5点であった。このうち第1点の歌について、元義は「私歌の軀之事御尋、先師賀茂真淵翁の歌の軀を好申候、然れ共学問之餘力ニよミ申迄ニテ、歌計ヨミ不申故、世上之歌よミの様ニ数ハ得よミ不申候」と、その歌は学問する過程で詠んだものであるとし、その学問については「総名古学ニテ御座候、然れ共只古学と計ニテハ何と申事分り不申候故、十二ニ割目を仕候、第一兵学、第二神道、第三歴史、第四地理志、第五氏族、第六国法、第七神事、第八政事、第九医学、第十名物、第十一文章、第十二歌学ニテ御座候」と答えており、ここには元義自身によってその学問の性格が語られている。

「平賀元義」展ではこの「口上案」の内容に従って資料を選択し、展示を構成した。その意味で「肖像」、「略年譜」、「先祖書上」などを展示した最初のコーナーの冒頭に、この展示会を象徴する「口上案」を配したのはいうまでもない。そして、神事や歴史関係の抄書類、「山陽道名所考」、「出雲国地理考」をはじめとする著作類などその学問にウェイトを置いて元義を紹介した。このほか、元義の歌、墨蹟については軸、卷子、屏風、扇面、短冊など資料の形状を考慮しながら展示資料を選択した。

この展示会を通じて感じたのは、元義の学問の幅の広さであり、歴史・地理への関心の深さである。その著作にはフィールドワークによった歴史資料として見るべきものが多い。歴史分野からの益々の研究が望まれる人物の一人であろう。なお、この展示会に矢吹氏のご好意で展示させていただいた羽生永明の手稿本「平賀元義」が出版準備中と聞く。完成が待たれるところである。



口上案

## 主な出品物

(資料名)	(点数)	(所蔵者)
平賀元義肖像	津島恭邦筆 1 幅	和気町 小森 一郎
口上案 (泰民部へ遣す口上書案)	1 巻	柵原町 矢吹 宏
先祖書上	1 冊	岡山市 平尾 幹雄
覚書・略年譜	1 巻	柵原町 矢吹 宏
楯之舍著述書目并蔵書目録	1 冊	〃
古事記考	〃	〃
群書類従抄	〃	〃
服部郷図写	1 鋪	〃
万国一覽図	1 巻	〃
山陽道名所考	2 冊	〃
美作国勝田郡塩湯郷御湯の記	1 冊	〃
平賀元義并門人寄書	1 幅	勝央町 赤堀 康興
平賀元義ほか寄書	〃	岡山市 松島 章雄
足高神社碑文草稿	〃	勝央町 赤堀 康興
神号幅	〃	〃
和歌幅	1 幅	岡山市 有森 猛
和歌扇子	1 握	吉井町 直原 正一
和歌幅	1 幅	岡山市 見垣 安邦
和歌幅	〃	英田町 山本 雅治
和歌幅	〃	備前市 三村 文夫
吉備津神社文書 (元義端裏書)	数 通	岡山市 吉備津神社
備前国一之宮神主難波大森家系図	1 冊	岡山市 吉備津神社
長歌屏風	2曲1隻	本 館
長歌并短歌屏風	6曲1隻	岡山市 谷口 澄夫
四季和歌屏風	2曲1双	岡山市 和田豊太郎
和歌短冊	5 葉	岡山市 坂根洋一郎
羽生永明手稿本「平賀元義」	6 冊	柵原町 矢吹 宏

# 備前焼の窯変とその源流

8.7~9.30

## 出品目録

品名	点数	時代	備考
須恵器 脚付 坏	1	5C末~6C初	長船町土師木鍋山出土
" 薬 壺	1	古墳時代	
" 提 瓶	1	"	総社市法蓮出土
" 脚付長頸壺	1	"	
" 薬 壺	1	"	山陽町大坂1号墳出土
" 横 瓶	1	"	" 岩田14号墳出土
" 平 瓶	1	"	" 石山6号墳出土
" " 1	1	"	" 岩田14号墳出土
" 提 瓶	1	"	" 石山6号墳出土
" 平 瓶	1	"	倉敷市矢部南向出土
" 大 壺	1	"	山陽町砂川河床出土
" " 1	1	飛鳥白鳳時代	寒風出土
寒風須恵器 大 壺	2	"	長船町西谷遺跡出土
" 長頸壺	3	"	"
" 平 瓶	7	"	寒風古窯跡出土
" 瓶子	1	"	"
" 平 瓶	1	"	"
" " 1	1	"	"
" " 1	1	"	銘「大」
" 長頸壺	1	"	"
" " 1	1	"	木の葉押形文付
" 提 瓶	1	"	"
" 陶 片	14	"	時実和ーコレクション 寒風古窯跡出土
須恵器 平 瓶	1	奈良時代	備前市佐山出土
" 脚付 壺	1	"	"
" 瓶	1	奈良~平安	"
猿 投 皿	1	奈良時代	施釉参考出品
山 茶 碗	1	平安時代	火礫初出
備前 壺	1	鎌倉時代	
" 直線文 壺	1	"	
" " 1	1	"	
" " 1	1	"	県指定重文 賀陽町妙本寺出土
" 壺	1	"	
" 直線文 壺	1	鎌倉~室町	
" 直線文 壺他	3	室町初期	水の子岩海底出土
" " 1	1	"	

備前 直線文 壺	1	室町時代	
" 三 耳 壺	1	"	
" 四 耳 壺	1	"	岡山市指定重文
" 注口小 壺	3	"	文明12(1480)年銘 県指定重文 勝山町若代出土
" 直線文 壺 及注口小 壺	2	"	県指定重文 賀陽町妙本寺出土
" 壺	1	"	
" 直線波状文 壺	1	"	
" 壺	1	"	
" 直線波状文 壺	1	"	
" 甕	1	"	
" " 1	1	"	
" " 1	1	"	
" 広口花 瓶	1	"	県指定重文 永正9(1512)年銘
" 直線波状文 壺	1	"	
" 波状蓮弁文 壺	1	"	
" 直線波状文 壺	1	"	
" 種 壺	1	"	
" 小 壺	1	"	
" 波状文 壺	1	"	
" 二 耳 壺	1	"	
" 経 筒	1	"	
" 薬 研	1	室町~桃山	
" 波状文 壺	1	"	
" 徳 利	1	"	
" 片身替 壺	1	桃山時代	
" 矢筈水 指	1	"	
" 蕪 徳 利	1	"	
" 波状文 壺	1	"	県指定重文 慶長15(1610)年銘
" 細 水 指	1	"	
" 三 耳 壺	1	"	
" ラッキョー徳 利	1	"	
" 四 耳 壺	1	"	
" " 1	1	"	
" 櫃壺形水 指	1	"	
" 大 壺	1	"	
" 大 甕	1	"	
" " 1	1	"	慶長18(1613)年銘
" 緋 礫 大 皿	1	"	
" 緋 礫 大 徳 利	1	"	
" 蕪 徳 利	1	"	
" 緋 礫 水 屋 甕	1	"	
" 三 角 水 指	1	"	
" 櫃 壺	1	"	
" 烏 帽子 水 指	1	"	

# 巡回展

# 博物館講座

## 岡山県の歴史と美

11.30～12.2

備前市市民センター

本館は、普及事業の一環として、巡回展を県内各所で実施している。展示品目や点数は、資料の運搬や保存状況、固定ケースの有無等の要因により制約されるが、出品物は館蔵品の考古・美術・古文書・民俗・刀剣・陶磁器の各部門の内から開催地にゆかりの深い資料を中心に選定された質の高いものばかりである。「岡山県の歴史と美」を共通のテーマとし、今年度の備前市を含め、10年間にわたって14の会場を巡回してきたが、いずれも地元教育委員会の協力を得、好評をいただいた。しかし、本館を訪れにくい遠隔地での開催という当初の趣旨が薄れてきたため、次回からは隔年開催となる予定である。

### 出品目録

- |                     |           |             |
|---------------------|-----------|-------------|
| 1. ナイフ形石器           | 玉野市宮田山出土  | 旧石器時代       |
| 2. 特殊器台破片           | 総社市宮山出土   | 弥生時代        |
| 3. 仿製内行花文鏡          | 備前市丸山古墳出土 | 古墳時代前期      |
| 4. 袈裟襷文銅鐸           | 岡山市兼基出土   | 弥生時代        |
| 5. 子持装飾須恵器          | 長船町出土     | 古墳時代後期      |
| 6. 足利尊氏御教書〈県重文〉     |           | 南北朝時代       |
| 7. 紫糸威腹巻            |           | 室町時代        |
| 8. 宇喜多能家像〈県重文〉      |           | "           |
| 9. 日禊書状 来住法悦あて      |           | 江戸時代初期      |
| 10. 池田光政 元旦試筆       |           | 延宝6(1678)年  |
| 11. 浦上春琴, 武元登々庵等詩画卷 |           | 文化11(1814)年 |
| 12. 図像抄             |           | 鎌倉時代末期      |
| 13. 吉備真備入唐絵詞断簡      |           | "           |
| 14. 法然上人伝法絵断簡       |           | "           |
| 15. 文人諸家貼交屏風 浦上玉堂他筆 |           | 江戸時代後期      |
| 16. 誕生石図 淵上旭江筆      |           | "           |
| 17. 妓女図 柴田義董筆       |           | "           |
| 18. 備前焼大甕           |           | 鎌倉時代        |
| 19. 水の子岩出土備前焼       |           | 室町時代初期      |
| 20. 備前焼火櫛大徳利        |           | 桃山時代        |
| 21. 閑谷焼獅子香炉         |           | 江戸時代        |
| 22. 本蓮寺文書           |           | 室町時代        |
| 23. 菊牡丹透華鬘 牛窓弘法寺伝来  |           | 南北朝時代       |
| 24. 草花蒔絵螺鈿櫃         |           | 江戸時代初期      |
| 25. 盤香具             |           | 江戸時代後期      |
| 26. 内裏雛             |           | "           |
| 27. 正阿弥勝義金工品        |           | 明治時代        |
| 28. 備前刀作刀工程 今泉俊光作   |           | 現代          |

恒例となった『博物館講座』を下記の内容で実施した。本講座は、「岡山県の歴史と文化」のテーマの下、外部の専門家や本館学芸員を講師とし、館蔵の実物資料を活用しながら郷土の豊富な文化遺産を理解しようとするものである。本年度も募集人員を大幅に超える応募をいただいたため、抽選により受講者を決定したが、こうした状況がここ数年続いており、当館としても何らかの対応を考えざるを得ないと思われる。ともあれ、少しでも多くの方々に博物館の役割を再認識していただき、博物館を上手に利用して欲しいと願う次第である。



### 講座内容

テーマ	講師	開講日
博物館の仕事	学芸課長 高橋 護	6.22(金)
道の歴史	主 事 田村 啓介	"
備前刀の誕生とその背景	学 芸 員 白井 洋輔	6.29(金)
平賀元義	主 任 竹林 栄一	"
北政所(高台院)と木下家の人々	歴史編纂室主幹 人見 彰彦	7.6(金)
岡山の南画	学 芸 員 守安 収	"
中国山地の民話	岡山民俗学会員 立石 憲利	7.13(金)
埴輪の誕生	学芸課長 高橋 護	"
吉備の神と仏	ノートルダム学院女子大学教授 神野 力	7.20(金)
瀬戸内の海上交通	主 任 竹林 栄一	"

昭和59年度 収蔵資料

購入資料

○田井浦遺跡出土品 一括 古墳時代中期

田井浦遺跡の出土遺物は、かつて吉備考古学会の水原岩太郎氏を中心とした師楽式土器研究の中で、田井浦式土器として報告されたものである。ことに5世紀後半期の師楽式（製塩土器）としては、他に発見例のない完形の土器を含み、きわめて貴重な資料である。

○鶴山丸山古墳出土仿製鏡（変形神獸鏡） 1面  
古墳時代前期

備前市にある史跡丸山古墳は、大量の鏡、碧玉製品を出土したことで著名であり、出土物の大半は現在宮内庁の所有に帰している。この鏡は出土の際散逸したもののうちの1面で、宮内庁所蔵鏡のうち最も優美なものに匹敵する優品である。



○拾遺古徳伝断簡 紙本著色 1幅 南北朝時代

本図は、善信と称した29歳の若き親鸞が、京都吉水の庵にいた法然を訪ね、入門する場面を描いたもの。

○鴨川夕涼図 絹本淡彩 1幅 大原吞舟筆 江戸時代

吞舟（?～1857）は柴田義董に師事した四条派の画人で、県下に遺作が多い。本図は鴨川べりの棧敷で納涼を楽しむ庶民の姿を軽妙洒脱に描いたもの。

○備中名所図 紙本淡彩 18図1帖 石川晃山筆 慶応3年

晃山（1821～69）は幕末に備中倉敷を訪れ、作画活動に励んだ南画家。本帖は備中の名所18か所の風景や風俗を写生画風に描いたもの。

○熊沢蕃山書語 紙本墨書 1幅

○浦上玉堂書額字「音之発」 絹本墨書 1幀



○備前焼 蕪德利 1点 室町末～桃山時代

この蕪德利は、自然釉（胡麻）の流れの方向や他の備前焼の口縁部が腹に付着している点に特色があり、窯結・焼成技法、窯変、変形の変遷をみる上で重要な資料といえる。



○漆掻き道具 一式

備中地域は、古くから漆の産地として知られていた。東寺百合文書の中にも、中世の新見庄から、庄園領主である東寺に多量の漆を貢納した記録が見られる。現在では、川上郡備中町で数人が漆掻きを続けているのみで、その道具類も貴重である。

寄贈資料

- |              |     |     |       |
|--------------|-----|-----|-------|
| 短刀 銘国次       | 1口  | 備中町 | 平川 篤  |
| 刀 銘菊文山城守藤原国清 | 1口  | 西宮市 | 森岡 寛司 |
| 埴輪（人物頭部）     | 1点  | 津山市 | 江原 滋  |
| 山田方谷詩幅       | 1幅  | 東京都 | 矢野 一郎 |
| 阪谷朗廬詩幅       | 1幅  | "   | "     |
| 雛人形、農具など     | 43点 | 岡山市 | 長瀬 庸夫 |
| 袴            | 1点  | "   | 岡本三重子 |

以上、貴重な資料の寄贈を受けました。長く大切に保管するとともに、本館の展示資料として有効に活用させていただきます。ここにご寄贈くださいました方々のご芳名を記し、厚く御礼申し上げます。

## 昭和60年度事業のお知らせ

### ○前期展「岡山県の歴史と文化」

3.16~9.27

昭和60年度の前期展は、「岡山県の歴史と文化」をテーマに、岡山県の原始時代から近世までの移り変わりを展示しています。

第一室では、総社市宮山遺跡出土の特殊器台や和気町大明神古墳出土の人物埴輪頭部、岡山市北浦八幡大塚出土の金製耳飾、さらに先般岡山市雄町から出土した銅鐸などを展示し、古代における吉備地方の繁栄ぶりがうかがわれます。

第二室では、中世の宗教美術を紹介し、牛窓町遍明院の五智如来坐像(重要文化財)、牛窓町宝光寺の絹本着色中不動三十六童子左右両界曼荼羅(重要文化財)、倉敷市安養寺の毘沙門天立像、新しく県指定重要文化財になった金銅板貼山伏笈(鏡野町円通寺)などとともに、県内の庄園関係の文書を展示しています。

第三室では、備前藩の藩政文書と日笠紙関係資料、それに民俗コーナーでは木地師道具と高瀬舟(復元)を展示しています。

第四室では、備前刀やその作刀工程の実物見本、邑久町北島神社の大鎧(重要文化財)とその展開図、壺を中心とした備前焼の移り変わりを紹介しています。

なお、期間中に一部展示替えを行いますので御了解ください。

### ○特別展「筑紫・吉備・大和」展

10.5~11.10

本年の特別展は、開館15周年の記念展として、例年の特別展に比べて、やや大型の企画展となるだろう。これまでの特別展が、郷土岡山県の文化に視点を置いた企画を軸に計画されていたのに対して、今回の展覧会では、他地域の異質な文化と見比べることによって、日本文化における吉備文化の位置づけを一層明らかにする展示方法を予定している。紀元前3世紀ごろ筑紫国に流入する大陸文化の強烈な刺激が、日本の在来の文化を一



銅鐸(岡山市兼基出土)

変させてゆくが、それは決して、大陸の文化の直輸入的な移植として展開するのではない。外来の文化に接したときそれぞれの地域によって個性的な受容の姿勢をみせている。吉備地方に、優れた文化の華が開いたように、筑紫にも、大和にも、それぞれ個性的な古代文化が開花していたが、そうした地域によって違いを示す文化の様相と合わせて、時代の移り変りとともに変転する歴史の潮流をうかがうことのできる展覧会をめざしている。

### ○テーマ展「岡山県の仏教絵画」

6.18~7.21

仏教絵画は、中世期までの日本絵画史においては主流をなすものであった。岡山県下の寺院にも様々なタイプの遺品が数多く伝来している。顕教・密教・浄土教・禅宗関係の絵画など実に多彩である。

このテーマ展では、国や県の重要文化財に指定された作品を中心に、岡山県を代表する仏教絵画の名品を展示し、それが有する美しさを享受すると同時に、その制作の背景にある信仰の様相をもうかがってみたい。



重文 阿弥陀二十五菩薩来迎図  
(牛窓町遍明院藏)

### ○テーマ展「たたら製鉄の歴史」

8.7~9.27

たたら製鉄とは、日本古来の砂鉄製錬をいう。当地域では古くから製鉄が行われ、平城宮木簡や「延喜式」によると、調・庸として鉄や鍛を貢納し、吉備の枕詞も「真金吹く」と詠まれた。今では山間に散在する鉄滓のみが、時代の趨勢の中で消え去った山地産業を象徴しているが、砂鉄と木炭資源に恵まれた中国山地一帯は、幕末~明治期の洋式製鉄技術導入前まで、国内屈指の産鉄量を誇った。

今回は、県内製鉄跡の出土遺物をはじめ、各種の歴史・民俗資料によってたたら製鉄の概要を紹介したい。

岡山県立博物館 だより		No.24
発行日	昭和60年3月31日	
発行者	岡山県立博物館 館長 友野 澄雄 岡山市後楽園1-5	
	☎(岡山) 72-1149	